

はらだちはんぶんにつき  
腹立半分日記

つついやすたか  
筒井康隆



角川文庫 5155

昭和五十七年六月十日 初版発行

発行者—角川春樹

発行所—株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話東京二六五―七二二(六代表)

〒一〇二 振替東京〇一九五二〇八

印刷所—厚徳社 製本所—大谷製本

装幀者—杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0-93-1-38315-9(60)

腹立半分日記

筒井康隆



角川文庫 5155

四月二十九日(金)

「面白半分」土屋氏来宅。七月号の内容とページ割り、完成。ページ数も増えた。「ていびい・じーびい」の写真を渡す。星・小松・半村の三氏がこれに科白を入れ、ぼくのを加えてグラビア頁に載せるわけである。第一回目はクラーク・ゲープル編。

「GEN」の創刊号、新聞広告がまったく出ないのはどういうわけだ。本も送ってこない。ひどいものだ。

四月三十日(土)

雨が降るたびに家の前の道路がぬかるむ。舗装しようにも、この道は私道で、勝手なことができない。そういえば三年ほど前、この道路の持主のお使いとやらが、舗装しますからといって十万円ふんどくつていったが、いまだにそのまま。持主は県の出納長という要職にある人で、そんなけちくさい詐欺をやるとは思えない。一度電話したのだが、奥さんが出てきてけんもほろろの挨拶であった。ひどいものだ。どうなっておるのだ。

「エディプスの恋人」二十回目を書く。

深夜、またしても隣家の主人の怒鳴る声。びっくりする。どうなっておるのだ。

「GEN」を、まだ送ってこない。どうなっておるのだ。

五月一日(日)

「エディプスの恋人」二十回目を投函。

「SFマガジン」用の「上下左右」を書きはじめる。枘目を製図器で描き、これが団地見立て。字数と行数の勘定に時間を費す。

ネオ・ヌル事務局長山本君、「ヌル」の合本十冊持ってきてくれる。さらに筒井倶楽部の岡本君も来る。両君は初顔合せ。

五月二日(月)

あつ。なんということだ。もう五月ではないか。あたふたしているうちに時間が経ち、あたふたしているうちに死ぬのだ。

「SFマガジン」の「上下左右」書き続ける。

夕刻、義父が電話してきて「読売新聞」に関西文化人長者番付の六位として出ていることを教えてくれる。収入は昨年とたいして違わないが、不況なので浮上したのだろうか。

運動不足なので妻の実家まで歩く。妻子は吉見君の車で来る。豪華な夕食ののち「刑事コロンボ」を見てから十一時半帰宅。

五月三日(火)

「上下左右」を書く。

夕刻、岡君が来て「上下左右」の科白の出来た分だけ、写して帰る。早く印刷屋にまわす為

である。一緒に晩飯を食い、ちよつと一杯ひっかけると、今岡君浮かれてベースを弾きはじめた。やはり編集者は若い人が面白い。

五月四日（水）

「面白半分」佐藤氏より電話。星新一が新編集長に就任のお祝いとしてお祝儀原稿をくれるとのこと。おれはしあわせな男である。

どんな原稿かは、本号をお読みいただきたい。

ところで読者諸君。今号のこの「面白半分」、歯ごたえはいかがでござったかな。

五月五日（木）

義母が「観音経」（唄入りに非ず）を持ってきてくれる。「上下左右」の資料である。

「エディプスの恋人」二十一回目を書く。

守口市教育委員会から講演依頼。ていねいにことわる。ていねい過ぎたためか、こちらの事情をいくら説明しても意に介さない人がいることを知る。気晴らしに、パチンコ。二千円スる。帰ってきてピーターを張りとはす。

五月六日（金）

「エディプスの恋人」書き続けているうち、次回二十二回目で完結してしまふことがわかって

きて、あわてる。読売に電話したが野村氏は会議中。早く連絡しなきゃいけないのだが。

ヴェランダに山鳩がやってきた。飯をやるうとすると土鳩がやってきて山鳩を追いはらい、自分が全部食べてしまった。山鳩の方が弱いらしい。もともと山鳩の方が先住民である筈なのだ。

五月七日（土）

ロタリーで三十分足らず、スピーチ。

野村氏に昨日の件で電話をする。野村氏、ちよつとあわてる。

快晴。向かいの児童館に鯉のぼりがひるがえる。わが家は特等席である。おかげで鯉のぼりを立てる必要なし。

「面白半分」から集った原稿の分だけコピーして送ってくる。

「編集者の小説」第一回は「小説現代」小島香氏であるが、奇妙な味を狙ったなかなかの作品で、感心する。第二回は「SFマガジン」今岡君の小説である。作家が編集者に原稿を依頼し、督促するわけで、みんな眼を白黒させている。面白い。

夕刻、新さん一家がやってきて、一族妻の実家へ集る。豪華な料理で飲んだあと、カレーライス。このカレーは先日文春の岡崎・田嶋両氏が持ってきてくれたデリーのカレーで、辛いもの好きの皆さんの為にとっておいたもの。二袋あるうち、辛い方のカシミールのカレーを食べる。なるほど辛い。しかしいまいものだから、食べているうちは辛さをあまり感じさせない。あとでこたえるのだ。

五月八日(日)

「エディプスの恋人」送稿。

夕刻より新さん一家、吉晃君、妻子とともに神戸へ出て、元町商店街をぶらつく。「フック」へ入り、夕食。タルタル・ステーキを食べる。仲輔、またしてもえらい食欲で、店の人が「お子さまには無理です」と言うのもきかずカエル料理を注文し、ひと皿全部たいらげる。

帰宅後「少年ジャンプ」手塚賞候補作品に眼を通す。

五月九日(月)

ながいこと休んでいたピーターの訓練士さん、今日からまた来てくれる。風疹だったそうだ。感染するといけないので養生していたのだらう。

手塚賞、選評、採点をして発送。「上下左右」にとりかかる。「サンデー毎日」に「エラリー・クイーンに選ばれた十二人の作家」として「ゴールデン・ダズン」の記事が出る。ほくとしては「如苦薩団」よりも「毫りあい」を選んでもらった方がよかったと思うが、アメリカでは子供を殺す話はタブーなのかもしれない。

ヴィデオ・デッキが来て半月になるが、便利なものである。

「タモリのなんでも講座」を一巻にまとめることもできる。今夜は「月曜ロードショー」の「チャップリンの街の灯」を一巻に納めた。

五月十日(火)

「上下左右」に難渋。結局何もできず。

何か面白いことがあり、何かを感じた筈なのだが、何も思い出さぬ。結局この日はほくにとつて何であったのか。

五月十一日(水)

今岡君、「上下左右」の原稿取りにくる。一部、白いままで渡す。

「奇想天外」対談原稿に手を加え、曾根氏に電話で送稿。

以前、新さんに頼んでおいた「歯科医から見た患者の非道さ」の原稿、「面白半分」のページが余りそうなので、ふたたび督促する。最近出版された歯科医を告発する本などを読み、反論を書くとほりきっている。いずれこの雑誌に登場するので、乞(こ)ご期待。

五月十二日(木)

「エディプスの恋人」最終回にとりかかる。

ボイラーの管がひび割れて水洩れ。水道屋が来る。まったく、このボイラーをつけたばかりに、金がかかってしかたがない。のべつ工事をしているのだ。そのたびに、ピーターを鎖でつなぐ。す(す)と(と)し(し)ず(ず)ち(ち)犬(犬)を(を)売(売)す(す)。土(土)事(事)こ(こ)なら(ら)ん(ん)。い(い)ら(ら)ら(ら)す(す)。胃(胃)が(が)重(重)く(く)な(な)る(る)。頭(頭)髪(髪)が(が)脱(脱)け(け)歯(歯)が(が)抜(抜)け、